

# 永遠真理の創造と流出

— マリオンのベリユール説を検討する —

名須川 学

## はじめに

本稿ではデカルト（René Descartes, 1596–1650 年）の 1630 年 5 月 27 日付メルセンヌ宛書簡（AT-I, 151–154）<sup>①</sup> に現れる「永遠真理 *æternas veritates*」概念に対する解釈を巡る問題が取り上げられる。次は、テキスト当該箇所<sup>②</sup>の私訳である（適宜、圈点等の表記を用いた）。

貴方は私にこうお尋ねです、「神が永遠真理（*æternas veritates*）を配した（*disposuit*）のは、如何なる類<sup>たぐい</sup>の原因においてなのか」と。私はこの様に答えます、「全ての事物<sup>もの</sup>を創造したのと全く同一の類<sup>たぐい</sup>の原因において、即ち、作動的かつ全体的な原因としてである」と。というのも、神は、諸々の被造物の存在についてと同様、その本質<sup>ほんしつ</sup>についても、その作者（*Authéur*）であるのですから。ところで、この本質<sup>ほんしつ</sup>はこれら永遠真理（*ces veritez éternelles*）以外の何ものでもありませんが、私はこれらを太陽光線（*les rayons du Soleil*）の様に神から流れ出る（*émaner de Dieu*）とは考えず、次の様に考えます。神は全ての事物<sup>もの</sup>の作者であり、また、これら諸々の真理は何らかの事物<sup>もの</sup>であり、従って、神がそれら「諸々の永遠真理」

の作者である、と。

マリオンは、『デカルトの白紙の神学について』において、ここに現れる「永遠真理が神から太陽光線の様に流れ出る」という表現<sup>③</sup>のみを根拠として、デカルトはこの箇所においてベリユール（Pierre de Bérulle, 1575–1629 年）の神学説を批判しているものである、と解釈する<sup>④</sup>。しかし、このマリオンのベリユール神学説に対する理解そのものに明らかな誤謬があり、そのみをもって上記テキストの解釈をしようとするのは牽強附会である。

以下、マリオンが自説の典拠としているテキストを検討することによって、彼のベリユール神学説理解の誤謬がどこにあるのかを明らかにし、もって、上記引用箇所における「永遠真理」概念がベリユール説とは関係のないことを明らかにしたい。

## 1. マリオンが典拠とするテキスト

まず、マリオンが引用するベリユールのテキストのうち、氏の説を支える典拠の主たるものは以下の通りである（以下、全て私訳）。

- ① 恩寵の秩序において、神は（…）人間が諸々の永遠なる真理（*vérités éternelles*）を認識し、神的であり創造されざる（*incrée*）善

をしっかりと享受し所有することができるようになさる (…)<sup>(4)</sup>。

- ② 常に創造しつつ、常に世界を自らに関係付け、この世を統治し絶えざる創造によって創造し続ける神を賛美しよう。かくの如くして、創造された存在は常に神から流出し続け (émanant)、この絶えざる永続的な流出 (émanation) に依らずして存続はせず、常に現在するこの流出 (émanation) を除いては、如何なる内実ももたないのである<sup>(5)</sup>。

- ③ というのも、永遠なる御言 (le Verbe éternel) は神より流出され (émané) 常に流出しつつあり (toujours émanant)、神を自らの源として注視しているのではあるが、この神からの流出 (émanation) においてまた神への注視及び関係において、欠如せず、依存せずして (sans dépendance)、御言はあるのだから (…)<sup>(6)</sup>。

- ④ かように神的であり、かように神から流出 (émanée) され、かようにイエスに所有されるこの非依存性 (indépendance) はまこと (…)<sup>(7)</sup> 敬服するに (…)<sup>(7)</sup> 値するものである (…)<sup>(7)</sup>。

- ⑤ それら神的流出 (Les émanations divines) は、それらが神から発出する (procèdent de Dieu) のと同様に、聖霊の産出 (la production du Saint-Esprit) に至って神へと終止する。これ [=聖霊] は、それを産出する (produisent) 父と子同様に、神である<sup>(8)</sup>。

これらに目を通せば、たしかにベリユールが “émanation” という概念を独特の意味で使用しているということは一目瞭然である。マリオンはこれらの箇所に見れる “émanation” 及び “indépendance” という概念をもって、デカルトの戦うべき「流出と非依存」の説だったとする。この点については検討を要する。

## 2. ベリユールの “émanation” 概念は新プラトン主義的「流出」ではない

マリオンの解釈における最大の問題は、ベリユールの著作には「“les vérités éternelles” は神より流れ出る (émaner de Dieu)」という直接の表現が見られないことにある。現に、マリオンの引用箇所のうち “les vérités éternelles” について述べられるのは①のみであり (しかも不思議なことにその出自を明確にしていない)、ベリユールの用いた各々の概念の内包を誇大に解釈し結び付けなければならなくなる<sup>(9)</sup>。

そもそも、①は、「恩寵の秩序において」と言っている通り、「救済」に関する神学的内容が述べられている箇所であり、もしもデカルトの 1630 年 5 月 27 日付メルセンヌ宛書簡に見れた “ces veritez éternelles” をこの①における意味で捉えようとすれば、必然的に、メルセンヌ宛書簡において一貫していた「神学にはコミットしない」というデカルトの態度が大きく崩れることになり、とても整合的な解釈とは言えない。

デカルトの書簡における問題の箇所をベリユールの神学説と関連付けようとするマリオンの意図は至って単純なもので、「デカルトと親交のあったこの人物が偽ディオニシウス・アレオパギテス及び新プラトン主義の影響を受けているために、その流出説をデカルトが批判した」という物語を

創作しなかったからに過ぎない。ところが、マリオンはこのベリユールの教説を取り上げるに際して、ベリユール研究の専門書に敷衍することもなく、単に自らの創作物語にとって都合のよい「単語」を見つけては、それを含む箇所を引用してくるだけである。こうして氏の「偽ベリユール神学」は創造されることとなる。

マリオンが引いてきたベリユールの教説は、主として 1623 年に上梓された『神性と人性とのえも言われぬ一致によるイエスの状態と偉大さ——この讃歎すべき状態に従ってイエスと聖母に捧ぐべき服従と献身 *Discours de l'état et des grandeurs de Jésus, par l'union ineffable de la divinité avec l'humanité et de la dépendance et servitude qui lui est due, et à sa très sainte Mère, ensuite de cet état admirable*』（以下、『イエスの状態と偉大さ』）における神学説である。それでは、それから 1629 年までの間にも幾つかの著書が記されていたにも関わらず、マリオンは、何故、この著作一書のみを引いてくるのであろうか。

ルイ・コニエ（Louis Cognet）の研究書<sup>(10)</sup>によれば、ベリユールがディオニシウスから新プラトン主義的形而上学と霊的宇宙の位階的思想を採り入れているのは、1605 年から 1615 年のことである。しかも、この影響は、決して「流出説」にあるのではなく、むしろキリスト教的な「献身 servitude」を論理化するために「否定神学」の要素を取り込み、また、「位階的上昇」を強調するためのものであった<sup>(11)</sup>。ところが、この「献身」概念が発端となり神学的論争に巻き込まれることになり、マリオンが引く 1623 年に上梓された『イエスの状態と偉大さ』には、パウロ的な主題とキリストの神秘体の神学が展開されることになり、ディオニシウ斯的な主題は脇に押しやられていくのである<sup>(12)</sup>。勿論、それは脇に押しやられて

いるのであって全く無くなったのではないが、その後死ぬまで続くイエズス会との闘争の全期間において、「流出説」を理由に異端者として批判されたという事実は全く無い。

こうした状況証拠から、ベリユールにあっては“émanation”が異端的「流出」という意味で用いられているのではなかったと考えるほうが自然ではなかろうか。

### 3. 三位一体における“émanation”概念

それでは、ベリユールが言う“émanation”とは何なのだろうか。これについて理解するには、これを伝統的なキリスト教の「三位一体 Trinitas」の教義と比較する必要がある。

周知の通り、キリスト教における「三位一体」の教義は、神は「父・子・聖霊の三つの位格にして一つの実体 *tres personæ, una substantia*」というものであるが、325 年にコンスタンティヌス大帝の発議により召集されたニカエア公会議において定められ、この結果、ギリシア神学的なアリウス派は異端として追放された。このときに定められたのが現代でもミサ曲を通じてよく耳にする「ニカエア信条 *Symbolum Nicenum*」である。

次は、子なるキリストは「神から生まれ創造はされず（即ち、被造物ではなく）、父と同質である」ということが記された箇所である。

Et in unum Dominum Iesum Christum, Filium Dei unigenitum, et ex Patre natum ante omnia saecula. Deum de Deo, Lumen de Lumine, Deum verum de Deo vero, genitum non factum, consubstantialem Patri; per quem omnia facta sunt.

そして [私は信じる]、一なる主イエス・キ

リスト、神の独り子にして、全ての世より先に父より生まれた者を。神からの神、光からの光、真なる神からの真なる神、創造されずして生まれ、父と本質を共にする。これによって、全てのものは創造された。

ここで「父が子を生む」ことは「産出 productio」という神学的概念で表される。この「産出」という神学的概念は、グノーシス的あるいは新プラトン主義的「流出 emanatio」に対する批判<sup>①</sup>の上で成立した。特に「流出」という概念の場合、「流出されたもの」には「欠如」の概念が付随し、「父と子がその本質 (substantia) を等しくする」ということと矛盾すると考えられた。これに対して、子は父と独立し、位格として区別されると理解された。即ち、ベリュールからの引用③及び④において「御言<sup>みことば</sup>」としてのキリストが描写されるに際して、父からの「流出」、父への「非依存」、そして「非欠如」と言われた事柄は、「三位一体論」における御子の「産出」概念そのものである。

更に、381年のコンスタンティノポリス公会議の決定におけるニカエア・コンスタンティノポリス信条には、聖霊が、父からのみならず子<sup>みことば</sup>からも生まれることを表す「子と共に Filioque」の文言が書き加えられた。これによって東西のキリスト教においていわゆる「フィリオケ論争」が起り、分裂することになった。

Et in Spiritum Sanctum, Dominum et vivificantem, qui ex Patre *Filioque* procedit.

そして [私は信じる]、聖霊、主にして生命を与える者を、それは父と子<sup>みことば</sup>とから発出する。

ここに現れる「発出 processio」という概念は、

上記「産出 productio」に対して、「聖霊が生まれる」ことを表す神学用語である。これに対して、ベリュールは⑤において、本来“processio”即ち“procession”を用いるべき場所でありながら、“productio”即ち“production”を使用している。ベリュールにおいては、「三位一体構造」における“production”及び“procession”という概念の区別<sup>②</sup>を薄めるために用いられたのが“emanation”概念だったのだと推測される。

事実、彼は1622年以降、しばしばラテン教父とりわけアウグスティヌスが好んで用いた三角形の図式に従って、神の本質的「一性」における各位格<sup>③</sup>の絶対的平等性を強調している<sup>(13)</sup>。それ故、『イエスの状態と偉大さ』には次の様にある。

(…) なぜなら、信仰と神学の奥義が教えるところによれば、完全に一つで、完全に譲渡可能な神の本質は、神の全ての位格のなかで一つの同じ本質であり、神は自らの外ではなく、自らの内に自分に等しいものをお造りになる。またもろもろの流出は内在的なものであり、造られざる位格は互いに所有し合い、含み合い、包摂し合うのである。<sup>(14)</sup>

それでは、②において、「世界」の「創造 création」に対しても、この「三一」の内在的關係に用いられる「流出 émanation」という概念を使用しているのは何故だろうか。

それは、ベリュール神学においては、「御言<sup>みことば</sup>」である「イエス」自身<sup>④</sup>が、我々がその中で生きている「世界」そのものであるからである<sup>(15)</sup>。キリストは「受肉した御言<sup>みことば</sup>」であり、このために「創造された本性」(人性)と「創造されない本性」(神性)とは、このキリストの内に完全な一致を見る(神人)。そして、キリスト者は、このキリ

ストの「諸状態」に倣い、その己れの人生の出来事と符合するキリストの各瞬間において、彼の内的生活に自らの内的生活を一致させる<sup>(16)</sup>。この「諸状態」が①において「諸々の永遠真理」あるいは「神的であり造られざる善」等の言葉で表現されるところのものだったのである。

こうなるとベリユールの言う「永遠真理」は、キリスト教神秘主義における「神学」上の概念であり、「形而上学」にのみコミットしていた 1630 年のデカルトの書簡における問題意識とは、余りにかけ離れていると言える。かくして「偽ベリユール神学」は白紙へと戻された。

## 結 論

そもそも、デカルトの書簡における当該箇所では、彼は神を「太陽 Soleil」に類比する一方で、それを「創造者 Créateur」とは呼ばず、敢えて「作者 Auteur」と称している。この厳然たる事実をマリオンは綺麗に取り除いて、「太陽」の比喩をベリユールの神学説に結び付ける。マリオンの語る「偽ベリユールの虚構の神学」にとって、この語は不都合であったに違いないからだ。というのも、神を「太陽」として、また「職人<sup>デミウルゴス</sup>」として例えたのは、他ならぬプラトンであったのだから。

そうであれば、直接、プラトン主義との関係を考えるほうが素直ではないだろうか。

ルネサンス・プラトニズムの中心的存在であったフィチーノは『ピレボス注解 *Commentaria in Philebum Platonis: De Summo Bono*』<sup>(17)</sup> 第 1 巻第 15 章において次の様に言う。

ところで、善に由来し、全ての知性や種や事物を貫く光がある。この光は全ての合致の

原因であり、だから全ての真理の原因である。つまり、それは真理の光なのである。それだから『国家』第 6 巻では、善は光の源泉であり、そこから流れ出る光は真理の原因であるとプラトンは言うのである<sup>(18)</sup>。

この所謂「真理の流出説」に対し、第 1 巻第 17 章においては、「真理の範型説」を紹介する。

(…) [プラトンは]「一性」と言うときには神——全世界の製作者——の知性のうちにある万物の永遠の諸原理のことが理解されることを望んでいる。(…)そして、神の知性のうちに創造されるべき種があるのは、製作者の魂のうちにその作品の範型があるのと同じこと (…)<sup>(19)</sup>

しかし、フィチーノは第 2 巻第 4 章において、この「範型説」を批判し、乗り越えようとする。

創造、製作、生産があるが、そのうちの「創造」は間違いなく神に関係するものであり、神はイデアなしに、そして先立つ素材もなしに作業するのである。何故なら、彼ご自身がこれらのものどもを産出するのだから<sup>(20)</sup>。(…)故に、神はお示しになっている、即ち、先立つ素材の如何なるものもなしに、無限を万物の基礎に据え、また、先立って存在するイデアの如何なるものもなしに、限度を無限に適用した、ということ<sup>(21)</sup>。

即ち、プラトニズムの「範型説」に対する批判、即ち、「永遠真理創造説」は、既に、フィチーノによって先取りされていたのである。これがルネサンスにおけるキリスト教的プラトニストのもつ

また一つの事実なのである。

キリスト教の歴史において、神における「範型としての数的秩序」に対する問い掛けを初めてなしたのはアウグスティヌスであった。彼は『創世記逐語注解 *De Genesi ad litteram*』第4巻第6章において、旧約聖書『知恵の書』第11章第20節の聖句「あなたは全てを尺度と数と重みによって配された *omnia mensura et numero et pondere disposuisti*」を引きながら、次のように問う。

被造物全てが自らの尺度と数と重さをもつように配された (*disponerentur*) のであるとすると、このように配する (*disponens*) 神ご自身は、これらのものをどこで認識したのであろうか<sup>(22)</sup>。

これに対する答えは、次のようなものであった。

(…) 我々は、神がご自身を知るようにして神の本質を知る、ということはないだろう<sup>(23)</sup>。

おそらくは、深くアウグスティヌスに共感を示したメルセンヌが「神が永遠真理を配した (*disposuit*)」と言ったとき、この『知恵の書』に関わるアウグスティヌスの問いをそのまま反復してに違いない。アウグスティヌスが踏み止まったその場所から、デカルトは——フィチーノ同様に——その先へと進んだのである。

#### 注

- (1) 「アダン・タヌリ版全集第1巻、151～154頁」を表す。以下、デカルトのテキストはこの全集から引用し、引用箇所は同形式に従って表記する。
- (2) AT-I, 151-152: “Vous me demandez *in quo genere causæ Deus disposuit æternas veritates.*

Le vous répons que c'est *in eodem genere causæ* qu'il a créé toutes choses, c'est à dire *vt efficiens & totalis causa*. Car il est certain qu'il est aussi bien Auteur de l'essence comme de l'existence des creatures: or cette essence n'est autre chose que ces veritez éternelles, lesquelles ie ne conçois point émaner de Dieu, comme les rayons du Soleil; mais ie sçay que Dieu est Auteur de toutes choses, & que ces veritez sont quelque chose, & par consequent qu'il en est Auteur.”

- (3) Jean-Luc Marion, *Sur la théologie blanche de Descartes*, PUF, 1981, pp. 140-159.
- (4) *Ibid.*, p. 141: “Dans l'ordre de la grâce, Dieu... rend l'homme capable de la connaissance des vérités éternelles et de la jouissance et possession solide de la bonté divine et créée...”
- (5) *Ibid.*, p. 145, n. 8: “Adorons Dieu toujours créant, toujours référant le monde à soi, et régissant ce monde et le créant par une création continuée, en sorte que l'être créé est toujours émanant de Dieu, et n'a de subsistance qu'en cette émanation continuée et perpétuelle, sans avoir aucune consistance hors de cette émanation toujours présente...”
- (6) *Ibid.*, p. 147: “Car encore que le Verbe éternel soit émané et toujours émanant du Père, et qu'il le regarde éternellement comme son origine et son principe; il est en cette émanation de lui et en ce regard et relation vers lui, et sans indigence, et sans dépendance...”
- (7) *Ibid.*: “Et cette indépendance ainsi divine, ainsi émanée de Dieu et ainsi possédée de Jésus est très digne d'être... admirée...”
- (8) *Ibid.*, n. 10: “... Les émanations divines, comme elles procèdent de Dieu, se terminent à Dieu en la production du Saint-Esprit, qui est Dieu comme le Père et le Fils qui le produisent...”
- (9) マリオンはベリュールがキリストを永遠なる御言 (le Verbe éternel) と呼び、更には、「太陽の太陽」と言っていることを指摘しているのだが (*Ibid.*, p. 142.), そうすると、一方で, “les vérités éternelles” の出自をキリスト (御言) であると考えれば, 「神からの流出」ということは言えなくなるし, 他方, その出自を神であるとすれば, 「太陽光線が流出するように」という表現と



は全く関係がなくなってしまうことになる。これだけでもマリオンの解釈が事実の歪曲の上に成立しているということが見て取れるように思われるのではあるが。

- (10) ルイ・コニェ著『キリスト教神秘思想史 3 近代の霊性』(上智大学中世思想研究所 翻訳・監修), 平凡社, 1998 年。
- (11) 同訳書, 421-422 頁。
- (12) 同訳書, 428 頁。
- (13) 同訳書, 437 頁。
- (14) 同訳書, 437-438 頁。
- (15) 同訳書, 449 頁。
- (16) 同訳書, 459 頁。
- (17) 以下, 次の全集からの引用を私訳した。  
Marsilio Ficino, *OPERA OMNIA*, CON UNA LETTERA INTRODUTTIVA DI PAUL OSKAR KRISTELLER, E UNA PREMESSA DI MARIO SANCIPRIANO, vol. 2, BOTTEGA D'ERASMO, TORINO, 1983.
- (18) *Ibid.*, p. 217: “Est aut lumen à bono, per mentes & species omnes, & res penetrans. Quod omnis adæquatiōis causa est, & ideo veritatis omnis, quod est veritatis lumē. Ideo in Repub. sexto significatur quod bonum est fons luminis, & lumen inde manens est causa veritatis.”
- (19) *Ibid.*, p. 219: “... quādo verò unitates [intelligi uult], rationes æternas omniū q̄ fiunt in mēte diuina, mūdi totius opificè, ... Neq:

minus sunt in Dei mente procreandorū species, quàm in artificis animo suorū operū exemplaria.”

- (20) *Ibid.*, p. 253: “Est enim creatio, effectio, generatio: Creatio quidē ad Deum attinet, qui & sine idea, & ex nulla præcedente materia operatur. Ipse enim ea producit.” 尚, ここで「これらのものどもを」と訳したのは代名詞 “ea” であるが, これが受ける名詞は “idea” 及び “materia” であるため, “eam” (女性・単数・対格) もしくは “eas” (女性・複数・対格) でなければならない。誤植である可能性もあるが, ここでは, “ea” を中性・複数・対格として取り, これら先行詞の意味内容を抽象的に受けたと解釈し, 「これらのものどもを」と訳出した。
- (21) *Loc. cit.*: “Ostēdit ergo Deus, id est, nulla præcedēte materia, infinitum iecit omnium fundamentum, & nulla præexistente idea terminum applicuit infinito.”
- (22) P. Agaësse and A. Solignac (eds), *La Genèse au sens littéral en douze livres*, (Œuvres de S. Augustin 48, Bruges — Paris, Desclée de Brouwer, 1972, p. 294: “Cum ergo haec ita disponderentur, ut haberent mensuras, et numeros, et pondera sua, ubi ea cernebat ipse disponens?”
- (23) *Ibid.*, p. 296: “... non utique nobis ita nota esset divina substantia sicut ipsa sibi.”